

会員スナップ



一原 有徳

かたつむりに
敷かれて
青き
地球
見る



箱根 寿保

米坂ヒデノリ

鯉のぼりが尾をからませ合った日はもう夙くにすぎたとい
うのに、野の花達は未だに咲き競わぬ。

百年の昔うっそうたる森林を焼き払い、百年の後、記念の
植樹を行ない……。

今年も亦離農して行くのか。

そして亦、ここは人間の住むべき処ではないのか。

JUN 1—1969



△ 月 × 日

6カ月振りの上京で楽しみにしていた一つ
に釣り好きの友人E兄と舟釣りをすることで
あった。鎌倉で一泊し早朝江の島沖へ出発。
出がけに船宿のおかみに船頭は変くつが多い
からネといわれる。変くつならシケはとら
ぬ。海はうねりが高く少々心細い。目的のアジ
はいっこうに魚信がなく皮ハギばかり、船頭
は気をつかい移動するがやはりダメ。E兄は
朝もやにかすむ富士山を見つける。さすがに
風格のある美しさである。船頭は富士はやは
りこの位置から眺めるのが日本一だという。
成程。

船宿にもどる。おかみは北海道のお客さん
いかがでしたという。皮ハギ40匹程という。
アア馬ネ。という。この辺では皮ハギを馬づ
らというらしい。勿論俺の顔を見ていった様
ではない。不愉快!

西村 徳一

今迄ずい分無理をして自分なりの型を固執して来た。そこで今度会員
になったのを機会に思い切って冒険を試みた。

数日前、なんとか出来上がった作品を眺めてみて、さてこれが本当に自
分の描こうとしている作品なのかどうか、そしてこれから先どう進めば
良いのかと考えているうちに何か不安になって来た。この作品を出品す
るかどうか、搬入期日ぎりぎりまで考えてみたい。



熊谷 善正 刺げきの友…酒

ロマンチストのぼくは、月がとつても青いから……と泣いた時代があった。そ
の月が灰色で何んの変ても青くない、ぼくの旧作のマチエールと同じで、TVの画
像で見る限り驚くほどのことはない。

しかし引力のない世界がある。科学の世界では克服出来るが……ぼくの絵画す
る心は抵抗や刺げきのない、空気の中では生きてゆけない刺げきと呼ぶ酒を大い
に飲みたいと思っている。

若者たち、先人のつくった模倣の酒をのむな。破壊し、つねに創造せよ、とア
ート、フレンド理事長が言っていた。同感である。





田中 忠雄

○武蔵野美術大学

大学措置法案を前に学生の動きは騒然、教授会は頻度を増し。

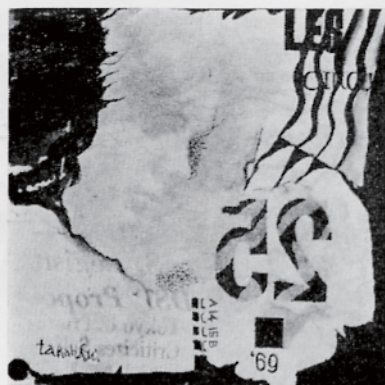
○文部省著作権法

喫茶店やキャバレーの音楽著作権使用者側の圧力で難航状態、何時法案提出となるやら。

○万博キリスト教館

若手教師と神学生の突き上げを建築費の増大で建つのかどうか。

私の周辺は以上のようにアトリエはホコリだらけです。



高橋 由明

夢を見た

地方文化は、今やさい果の末端文化になりつつある。甘やかされた絵かきさん達は、アトリエを建て、車でのたまわり、外国へ飛んで行く。北方風土のきびしさがあっても世の中にご眉、偽装の中で一人絵をかき、公募展年一回のおつきあい。ブラウン管の画面にニヤつくタレント。科学先行時代なれば、地方文化こそ前衛な皮肉。だがこのままでは、末端文化のコンプレックスが続く。ガンをとたけ、公募展滅亡論万歳、全道展バンバンゼイ、という夢を見た。

渡会 純价

昨年この頁に「目下思索中」のひと言を書いた。

それは僕にとって人生の分岐点を考える重大事であった。

その結果、勤めを辞めて版画家という肩書の自由業に転じた。

生活と制作、種々問題は多いが、じっくりあせらずマイペースの制作を続けてゆきたい。

そんなこの頃である。

八木 伸子

街を、白いスカーフをなびかせ、ミニのお嬢さんがサッと過ぎる。「アー素敵、私もやって見ようかしら」。オズオズとスカートたくし上げ、鏡を見れば、オー幻滅。我が身をかえり見ず、マネをすることはハズカシーことなると悟りました。



竹内 省吾

本年の会場は道新ホールとのこと、なにかとご苦労さまです。小生、遠地にあつて協力どころか会費納入の義務まで怠りまことに申し訳ありません。早速お送りします。病いで挫折しておりましたのがこのごろ漸く回復、筆をとっております。再起一作、「神父館」「女優Y子像」を出品できそうです、そのせつはよろしく。9月下旬半年ほどの予定で廻ってきますが、スペインのマドリドに寄りますから伏木田君に逢えるかも知れませんね。



谷口 一芳

小さな石のため大変に苦しみ手術をしてから半年、体調もよく、知らなかつたいろいろな世界を経験し、大いに感ずることがあつた。

創作する面にもこれが生かされる契機になればとすごしているこの頃である。



望月 正男

今年は雨が多いがあめあがりの素晴らしさにひかれて折々に海岸や山を歩きまわっている。

イルドフランスやコートダジュールの透明な空気、乾いて澄んだ色の階調や、ヴェネチアの粘り強い色の体質のようなものが道東の自然の中に強く感じられ魅せられている。



木村 良

公害もなく

道南の桜の名称で知られている青葉ヶ丘公園が小生宅の隣りにある。然しこの公園の桜よりも栗林がいい。文化財に指定されているがそれはともかく——春先の、こずえが空のグレーにとけこんでのび拡がるさま。それにもまして新緑が特によい。今年は春がおそく葉つきもおくれ永いこと楽しませてくれる。こんな季節になると無性に山や川をわたり歩きたくなり製作意欲も湧いてくる。

写真—川歩きの日から

小川 清彦

バンビの頃

奈良に来て4年になります。6月頃が一番観光客が多く、霞たなびく若草山のもと、人車それにバンビをつれた鹿の群で、ほんとに過密の季節となります。小生も一週一度の割位で遠来の知人を、観光案内するはめになり、今頃の季節は奈良在住の者にとって頭の痛い季節です。但し、全道展の方はその限りにあらず、奈良観光の節は御一報下されば、個人的、徹底的にサービスします。特に女性の方年齢不問にて……



原 義行

私はこんな絵が好きなんだ、と思って描いているうち、本当は好きでなかったような気がしたり、こんなものと軽い気持ちで描いていた絵がだんだん好きになったり、一体自分は本当は何が好きなんだろうと問うてみてもうろろと答えずらできない。一体私はどんな絵が好きなんですか、と人に問うてみたくなる。こんな人間であるだろうか。——ないよネ。ああ恥かしい、私はもっと心のある人間にならなければ、とこのごろ思っています。

大友 一夫

目下意欲大いに湧き出品作品に取組んでおります。乞御期待といたいが、作品が出来上るにしたがい、最初の素晴らしい発想が段々かすんで、しまいには泥んこの悪戦苦闘になってしまふ。今年も亦、乞不御期待になりそうだ。一神よ何とかならないものだろうかー。

陰の声（せつない時の神だのみ、虫がよすぎる）。





高橋 北修

体を悪くして既に10年。体が不自由のため、その間一度も旭川から他の土地に出たことがない。全道展の方々にも永い御無沙汰だ。それが昨年用件のため、一大決心のうえ札幌へ出た。行きは汽車戻りは車、10年振りでの旭川札幌間の沿道は懐しく快適。10年前まで、50年間、毎年回帰往復して眼にしみこんだ風景、緑の木と丘、街々の色が甦ってくる。家を出るときの不安はなく、旅に自信を得た喜びが、その日の最大の収穫だ。

谷内 丞

何年前か前、絵かきの中で「弥生」だの「縄文」だのと話題になったことがありました。近頃、この縄文のことが気になり、彼等の生活意識とは一体どんなものなのか考えています。私の目に触れる自然界は美的対象にすぎませんが、彼等には岩であろうが、樹木であろうが、飲料水、食物までもが、その中に生命の活力を感じとれたのでしよう。

そんな純粋な心を私の中にももちたいと思うきょうこの頃です。



T. Suna

砂田 友治

小野 州一

6月15日夜

今、一寸前に描き上げた絵を眺めている。描き上げたと言うより、正確には、もうこれ以上描けなという方が妥当だろう。

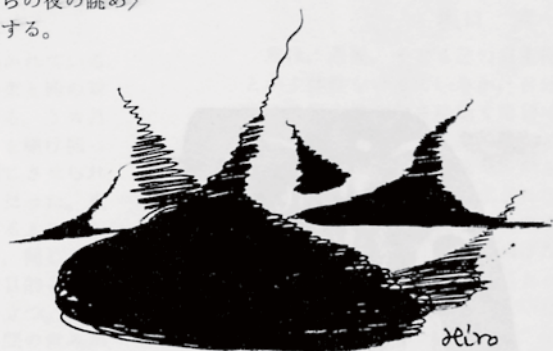
いつもの時のようにまた、時間が経ったら駄目な絵になって仕舞うだろうが、今はとても満たされたような思いで眺めている。

然し、この幸福な感じは少し酒に酔っているせいがあるかも知れぬ。

この青い80号の絵は、気が変わらなければ、〈窓からの夜の眺め〉というタイトルにする。

安多 郁子

すでに人々は遠くミレーの晩鐘を忘れ去った。いま乱世にもはや愛の片りんもなく、黄金の城も、はたまた人の子とても滅びのときに、今さら祈りだの愛だのとは痴人のたわむれか。探りつくせぬほどの深い「美」は人々のさまざまに近よれどさらに遠く高く、あえて柳の風情——にくき。しかし海辺には砂が、木には小鳥が、バラの木にはバラの花が咲くように、自然な愛がキャンパスを染めたとき見事に命が深められる——。然も輝やきつつ。



「土に帰る」

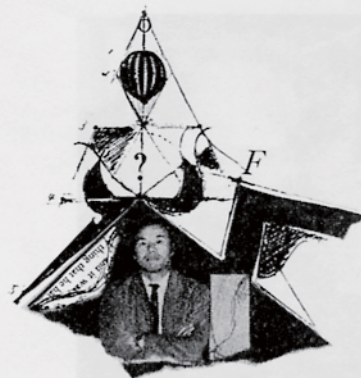
岸本 裕躬

隣りのオバサンが死んだ。平岸の火葬場で場内をふらつく。黒光りする焼却炉がずらりと並び焼上った遺骨が引き出され、灰白色の骨をハンデにつく音がカシヤマと場内にこだまする。床に落ちた骨はオヤジが落葉のように塵取りに掃き集める。涙枯れた肉親も、最早故人はそこになく、黙然として潮干狩りの美しい貝を拾うが如き空虚な爽やかさであった。待合室のテレビの音だけがワメキたてて響いていた。



秋山 進

仕事場を学校から自宅の一部へうつしての制作は、何となく落着かない。環境の急変もその原因の一つであろう。道具の位置が変わった。(ふだんから、きちんと整頓して仕事をする私ではないけれど)。何となく気がおらない。困ったものだ、つくづく思うこのごろである。今夏8月19日から東京三越で開かれる新樹会展招待出品作(乾添立女(1米20)2点の制作風景の一コマである。



野本 醇

新し土地室蘭に来て4カ月ばかり一、土地の人は霧を「ガス」とはきだす様にいうと聞く。きびしい風土である。きびしい風土の人情はことさら厚いという。いつかそのことが作品により意味で表われるのを待っている。この所々静物、シリーズを続けているが「もの」の置かれた存在の神秘(ふしぎ)さを実存的空間(造形)で解明したいものとアトリエ(物置)の薄明の中で努力している。しかしこの哲学は決して新しい事ではないようである。



八木 保次

架空の今日への生贄
かんそうした、雨季

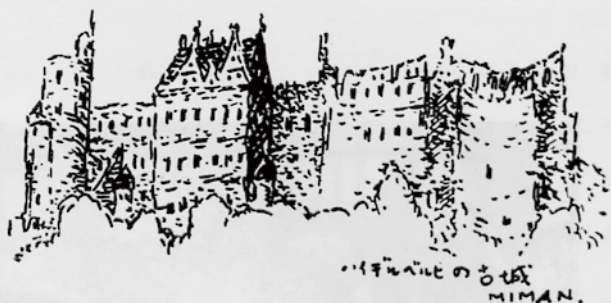
斎藤 洪人

多忙、多忙の毎日である。
5月の終りに、道北の寒村で小説を書いている友をたずねた。
オホーツクの海は荒れていた。
山々は、不順な天候で雪に彩られた。
夜、その村随一の料亭でたたか酒をのむ。
そのむかしのよき時代の話が、何と新鮮に感じたことか。
多忙なるがゆえの感動である。
多忙、多忙、万歳である。



柄内 忠男

1個の貝殻から限らないエモーションが広がる。翼にも似た青と白の色彩帯が形となって定着する。天と地との連結するイメージ。これが私への課題である。



城を作る話

遠藤ミマン

友人池本君は、バリーで、欧州の城の写真集を買った。ハイデルベルヒの城その他、そばへ行っては、石の積み方の「曲りまっすぐ」であることを発見した。そして彼は「僕たちは今、北海道独立運動を起しているんだ。」と団員をけむに巻いていた。帰国して彼は、ブロックやヒューム管などで、でかいかわい城を作った。名づけて「北海道美術王国」。彼はその王様？キチガイはどこにもいるが、「北海道美術王国」の夢がいいよ。いい絵を描こう！全道展！

渡辺 真利

50軒もの人間達が、いかにもその場づくりの不自然な突らみを取りつくって、共通階段をすれちがう鉄筋の建物から、ごく最近木造平家に引越した。ほんの一寸の空地に生える名もない草花、屋根づたいに聞える雨音、木立ちが風にゆらぐ様など、自然のしごくあたりまえの移り変わりが、とても身近かに感じられて今更ながら驚ろいているこのごろではある。 1969—6



竹岡 羊子

国立近代美術館で開かれている「世界の現代美術展—東と西の対話」が評判になっている。3カ月ヨーロッパとアメリカを駆け回ってきて、私がいつも感じさせられていたのも、このことだった。東と西の対話は、対立するところからなされるのではなく、同じところに立ち、同じものを目的とするところにはじめて成り立つ。芸術の世界がそうだし、人間の営みがそうだと思う。私は自分の作品をもっと広げたい。そしてもっと強めたい。



坂口 清一

私は、最近、子ども達の自主性とか主体性をいっているが、自分自身の自主性のなさに驚く毎日である。意欲の無い所に自主性などあるわけもないが、意欲だけにある。しかし、それが行動化されないのだ。つまり、表現する心のゆとりがない。多忙なことは描けない理由にはならない。作家にとって雑務というヤツに近寄らない努力も必要なのだが—。7月31日・第19回全道造形教育研究札幌大会で授業をやれという。そのエネルギーは大きい。